

和歴紀 歌代州 の藩徳 絶主川 景も家 眺め た



南紀男山焼 染付名草晩潮図大皿

紀州の三大窯のひとつである南紀男山焼。江戸時代後期に藩の殖産興業政策にそって稼働した御用窯で、紀州の名所・和歌浦を描いたものも多く見られる。

和歌山県立博物館
住所 / 和歌山市吹上1丁目4-14 電話 / 073-436-8670



駿河屋菓子木型 和歌の浦

徳川頼宣公とともに紀州に移り、御用達となった室町時代から続く菓子司。10代藩主治宝公は和歌の浦の名所を表した菓子を作らせた。当時を偲ばせる精緻な図柄の菓子型は和歌山市立博物館に所蔵されている。

和歌山市立博物館
住所 / 和歌山市湊本町3丁目2 電話 / 073-423-0003



和歌浦煎餅

不老橋や観海閣といった和歌浦の景勝地が焼印された煎餅。ほんのり甘く小麦粉の香ばしい香りが懐かしさを感じさせる。戦後から続く和歌浦を代表する煎餅は今もなお多くの人々に親しまれている。

鷹屋製菓
住所 / 和歌山市和歌浦南2-8-1 電話 / 073-448-1617

樹々に覆われた参道を抜け108段の急な階段を登り切ると、朱塗り極彩色に彩られた紀州東照宮の楼門が待ち受ける。振り返ると陽の光を受け、色あざやかに輝く和歌浦湾。そこに一筋の筆跡のようにすっと伸びた片男波が浮かび上がる。紀州藩主たちが憧れた、和歌の浦の絶景である。

なかでも初代紀州藩主徳川頼宣公は、その景色をこよなく愛した。父である徳川家康公に見せるように、権現山に東照宮を建立し、妹背山に三断橋をかけ母をしのぶ多宝塔を建てた。観海閣を設け、時の移ろいとともに表情を変えざる干潟の景色を築しむ場として民衆に開放し、紀三井寺から西国巡礼の旅人を和歌の浦へと誘うようにと渡し舟を出したという。権力者だけでなく一般の人々が自由に集い楽しむことができる名所を作る。頼宣公の領民への想いを知ることができる。

東照宮の権欄耳である西川秀周さんが、拜殿で厳かに祝詞をあげる。美しく磨き上げられた床。漆黒の漆と金箔の輝きが、荘厳なコントラストを放つ。そして天井近くに掲げられているのが、頼宣公が奉納した三十六歌仙額。頼宣公は和歌の聖地を守らせるかのように、玉津島神社と、和歌浦天満宮にも奉納した。「権現造りの社殿は、戦災で焼失することもなく、創建当初の姿をそのまま残しています。子供の頃に遊んだ身近な境内から見える日本遺産の和歌の浦の景色を、代々の藩主たちも眺めたと思うと感慨深いものがあります」と西川さん。

この「和歌の浦の絶景」は聖武天皇や紀州徳川家、そして多くの人々が愛で守ってきた「日本の宝」である。



三十六歌仙額

和歌神として尊崇された柿本人麻呂や山部赤人、紀貫之など36人の歌人を描いた扁額。玉津島神社の額は和歌山市立博物館に寄託されている。



妹背山と三断橋

妹背山は平安時代より、船頭山や妙見山、雲蓋山、夔供山、鏡山と共に玉津島六山とよばれた小島のひとつ。現在でも唯一小島として残り、当時の風景を伺い見ることが出来る。青石が敷き詰められた三断橋は県内に残る最古の石橋で、中国の杭州西湖にかかる六橋を模したといわれている。



観海閣から紀三井寺を眺める

玉津島神社の向かい、妹背山に建つ観海閣。頼宣公が紀三井寺を遙拝するために建てた木造の水上楼閣(現在の建造物は昭和36年に再建されたもの)で、背後には母を弔うために建立された多宝塔を配す。ここから眺める水辺の景色や名草山は絶景そのもの。頼宣公が愛した情緒あふれる風景は現在も息づいている。



頼宣公が奉納した三十六歌仙の扁額が飾られている拜殿で、神事を行う権欄耳の西川さん。そこは400年近い昔から変わらない神聖な空間である。

和歌祭で使用される大神輿。創建当初から伝わる古いもので、重さは1t以上で50人ぐらいで担ぐという。



紀州東照宮

徳川頼宣公により1621年に創建され、関西の日光とも称される。家康を東照大権現として祀り、本殿は左基五郎作の彫刻や狩野探幽作の壁画で飾られている。楼門に向かう108段の石段は「待坂」と呼ばれ、和歌祭では神輿を担いで降りる。

住所 / 和歌山市和歌浦西2-1-20 電話 / 073-444-0808

